

政治評論家

森田

MORITA
Minoru

実

さんに伺いました

聞き手

亀谷 一洋
編集委員[writer] 駒崎 文男
[photo] 永田 正男

「公共事業必要論」など社会資本整備に関する著書を上梓している政治評論家の森田実氏にこれからの土木についてお話を伺った。

2009年12月21日(月)
森田実氏自宅

土木は日本を救う力になる

——現在の経済財政運営のなかでの社会資本整備に対する考え方についてお聞かせください。

森田——社会の安定には、政府による公的な社会政策支出が必要です。不況になったら公共事業費を増やしたり、減税をする。インフレになりそうなどときには、それを抑えるための金融財政政策を採る。政府の役割は非常に重要です。特に、福祉や倒産防止、失業対策のための社会資本投資なくして、資本主義の安定はありません。

日本の最大の失敗は、自由競争と自己責任という新自由主義的政策を採り、不況を放置したことです。そのことを、私はずっと批判し続けてきました。『公共事業必要論』を出したのも、そ

れが最大の論点です。

資本主義にとって一番恐ろしいのは、不況です。今や不況を通り越して恐慌に陥っています。国民は将来を恐れ、希望を失いつつあります。日本の政府の誤りは、財政さえ良くなれば日本は大丈夫だという財政再建至上主義に陥っていることにあります。経済が停滞し、財政が落ちてきていますので、財政当局は経費の削減を考え、大事なもので全部切ろうとしています。しかし、こうしたことで成功した例は一度もありません。財政再建至上主義は、財政当局の自殺に等しい。それが今の状況です。

金融資本ではマネーが価値を生むといいますが、それは大嘘で、金は移動するだけです。真に価値を生むのは、人間の労働と技術革新だけです。今必要なのは、社会資本を充実するための全国的な計画をつくり、そこに金を出し、雇用を創出し、企業が活発に活動できるようにするこ

とです。そのときに一番即効性があつて確実なのが公共事業です。そういう意味では、土木は日本を救う力になるのです。

政府の役割は絶望しつつある日本人に光を与えること

——持続的な発展に向けて社会資本整備の果たすべき役割はどこにあるのでしょうか。

森田——私は伊東という港町で育ったこともあり、全国に旅行したときには必ず港を回り、今まで600以上の港を見してきました。アジアは海洋国家の時代に入っていますが、日本はそのなかで立ち遅れてしまっています。現在、日本に来る荷物の9割がパナマ運河を通ってきます。パナマ運河では拡張工事が進行中で、2014年に大型船が通れるようになります。しかし、日本の港は今のままでは水深が浅く、接岸できません。ですから、港湾の整備が大きな課題なのですが、

逆に予算は削られる方向にあります。大きな時代の流れをつかみ、日本をどのような方向にもっていくかというビジョンがないのです。

道路整備に関しても無駄だからやめてしまえという意見が大勢です。しかし、道は通じてはじめて道なのです。それを通じないうちにやめてしまえという。これほど無駄なことはありません。「コンクリートから人へ」というスローガンはとんでもない間違いです。コンクリートを否定しては人びとの安全は保てません。日本には30〜60年を経過した橋がたくさんありますが、その補修費用さえ節約しようとしています。事故が起こったときの費用は、補修の何百倍、何千倍にもなります。今のように補修をするのも無駄だという論理は、

より巨大な無駄をつくりだす恐れがあります。

公共事業についていえば、やるべきことはたくさんあります。羽田と成田を一体化しますと国交省が言っているのなら、そのための大トネル工事をして、リニアモーターカーを通せばいい。観光立国ということでは、日本には恵まれた自然や文化の資源が豊富にあります。それらを活かし、守るための社会資本投資は、みんなで知恵を出せばいくらでもできます。どうやったら日本をもっといい国、いい社会にできるか。そのために具体案を出し、お金を使う。そこに雇用が生まれ、仕事が生まれます。前向きになれば、人間はもつとエネルギーを発揮できるはずで、政府の役割は絶望しつつある日本人に光を与えることです。光と

して一番役に立つのは社会資本を充実させ、そこに仕事をつくることなのです。

日本の再生は地方から始まる

——今後の土木業界に対してご意見などありましたらお願いします。

森田——下水道、橋梁、トンネルなど、日本は世界的に優れた技術をもっています。それらにもう一度息吹を与え、チャンスを与える必要があります。これは政府の責任です。日本は災害が多く、絶えず地震が起こり、台風が来る。そうした日本の国土を守ってきたのは地方の中小規模の土木業者で、地方自治体と一体となって、地域社会の医者の役割を果たしてきました。徳富蘆花は「国家の実力は地方に存する」という言葉を残しています。これからの日本の再生は地方から始まります。

——地方自治体で働く者としてとても励みになるお言葉をありがとうございます。また、次世代をつくる若い人たちにメッセージをお願いします。

森田——土木は社会技術です。道路や橋、港湾、河川、上下水道など、直接人びとの生活にかかわり、社会と技術をつなぐということで、これほどやりがいのある仕事はありません。そういう意味では、一人でも多くの若い人たちに土木工学を学んでもらいたい。そして、土木技術者として、社会全体のことを考え、社会を良くしていくという気概をもって、日本の元気を取り戻す社会資本の仕事に取り組んでいってもらえればと思っています。



森田 実(もりた・みのる)さん プロフィール

1932年静岡県伊東市生まれ。東京大学工学部卒業。日本評論社出版部長、『経済セミナー』編集長などを経て、1973年に政治評論家として独立。著作・論文を著す一方、テレビ・ラジオ・講演などで評論活動を行っている。『国家の貧困』（共著、日本文芸社）、『新公共事業必要論』（日本評論社）、『建設産業復興論』（日刊建設工業新聞社）など著書多数。